

オペラ

▶教科書p.87

オペラ「リゴレット」

戸作曲者

ヴェルディ (Giuseppe Verdi, 1813 – 1901 [イタリア]) は、音楽とドラマの融合を達成した。貧しい家に生まれたヴェルディは、奨学金を得てミラノに留学するも、音楽院に合格できず、苦勞してオペラ作曲家への道を歩む。私生活での不幸を乗り越えて1842年に初演された『ナブッコ』は、当時のイタリアの祖国統一運動の気運に呼応して空前の成功をおさめ、作曲家としての地位を築いた。その後もヴェルディは成功と失敗を繰り返しながら、自己克己を重ねつつ、オペラの芸術性の深化を推し進めた。

戸楽曲について

『リゴレット』は、『トロヴァトーレ』『椿姫』と続くヴェルディの中期の最初の傑作。原作は、フランソワ1世の好色ぶりを風刺したヴィクトル・ユゴーの戯曲『歓楽の王』。しかしF.M.ピアヴェのイタリア語の台本が、フランス政府に配慮した当局の検閲により問題となる。場所を北イタリアのマントヴァに、登場人物もフランソワ1世からマントヴァ公爵とその宮廷に仕える道化師のリゴレットらに変更し、1851年にヴェネツィアで初演された。

16世紀、マントヴァ公爵に仕える道化師リゴレットは、愛する娘ジルダを誘惑してもあそんだマントヴァ公爵への復讐を殺し屋スパラフチーレに依頼する。しかし、リゴレットがスパラフチーレから受け取った死体は、マントヴァ公爵への思慕を捨て切れなかった娘ジルダのものであった。

戸鑑賞のポイント

●全曲の中でも最も有名なマントヴァ公爵のアリア「女心の歌」をはじめ、同じくマントヴァ公爵の「あれか、これか」「頬の涙が」、ジルダの「慕わしい人の名は」、リゴレットの「悪魔め、鬼め」と名アリアも多いが、四者四様の心理を描き分けた終幕の4重唱にも注目したい。(國土潤一)

オペレッタ「メリー・ウィドウ」

戸作曲者

レハール (Franz Lehár, 1870 – 1948 [オーストリア]) は、ハンガリー生まれのオーストリアの作曲家・指揮者。軍楽隊長だった父の駐屯地のハンガリーで、ハンガリー人の母との間に生まれ、ハンガリー語を母国語として育った。プラハ音楽院でドヴォルジャークらに師事した後に軍楽隊に入る。ワルツ「金と銀」で成功し、アン・デア・ウィーン劇場などでオペレッタを上演した。『メリー・ウィドウ』『微笑みの国』といったオペレッタは、20世紀を代表する傑作である。ウィンナ・オペレッタの甘美な音楽に、ハンガリーの民族的な音楽を加味したオペレッタは、レハール独自の魅力を放っている。

戸楽曲について

『メリー・ウィドウ』は、その名の通り陽気な未亡人のハンナ・グラヴァリを主人公とした物語。V.レオンとL.シュタインのドイツ語台本に作曲された。1905年にウィーンで初演されている。20世紀初頭のパリを舞台に、架空の国ポンテヴェドロの大富豪の未亡人ハンナと、かつての恋人でパリ駐在の外交官のダニロ・ダニロヴィッチの恋のかけひきと、パリ公使ツェータ男爵の夫人ヴァランシェンヌと浮気相手のパリの伊達男カミーユ・ドロジョンの浮薄な恋。二つの恋模様が、楽しく歌われる。

戸鑑賞のポイント

●ダニロの登場の音楽「マキシムの歌」は、折々にさまざまな様相で使われる。ハンナの「ヴィリアの歌」や「間抜けな兵隊さん」ははじめ、美しい音楽に満ちているが、クライマックスでのハンナとダニロの2重唱「くちびるは黙っていても」は、「メリー・ウィドウ・ワルツ」として知られている(→教科書p.34)。クラスの男女をダニロとハンナにして歌ってみよう。ミュージカルとの関連性も感じてみよう。(國土潤一)